第６節　まとめ

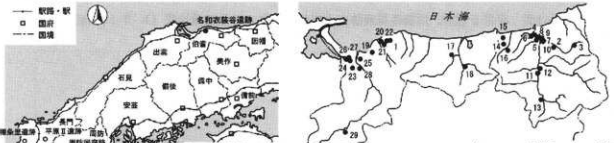
１．遺構と遺物

今回の調査で、縄文時代と平安時代の遺構、江戸時代と推定する遺構を検出し、縄文時代中期と古墳～平安時代前期、江戸時代後期の遺物が出土した。縄文時代については、貯蔵穴が検出されており、生活の場が近くにあったと想定できる。大山山麓における当該期の遺跡は少なく、貴重な資料となろう。平安時代では、後述するように大型の掘立柱建物や緑釉陶器などを検出しており、古代の本地域を考える上で重要な位置を占める。江戸時代については、当時の村山における活動を知る上で貴重な手がかりを得ることができた。中でも平安時代前期の遺構と遺物は量も多く、当時の様相を具体的に探る手がかりになり得ると考える。そこで以下では、当該期の遺構と遺物から当時の本地域を探ってみたい。

中心となる遺構は、１・２号掘立柱建物である[1]。両建物とも２×５間と大型の建物で、主軸を同じくし、区画溝の可能性がある３号溝を伴う。遺物についても、緑釉陶器や転用硯が出土している。これらは、一般の集落における検出例は少なく、官衙や荘園の庄所、有力者の居宅、寺院といった性格の遺跡に多い。しかし、両建物の柱穴規模は小さく、柱痕跡も細い。また、柱穴底面のレベルにもバラつきがあり、柱筋も通らない。これらは、前述のような施設の中心的な建物が示す特徴とは大きく異なる。さらに、調査区内に同時期の建物が存在しないことも注目される。１もしくは２棟のみでは、施設として機能しないことから、両建物は施設の一部であり、他に中心となる建物が存在したと考えられる。したがって、雑舎[2]や工房など、前述のような施設の周縁にある建物の可能性が高い。

２．古代山陰道について

本遺跡の性格を考えるにあたり、周辺の交通に目を向けてみたい。火山灰台地であり、内水面交通が発達しづら



第43図　鳥取県内の緑釉陶器出土遺跡および周辺主要駅路

第14表　鳥取県内の緑釉陶器出土遺跡

No.	遺跡名	出土点数（防長窯）	緑釉陶器の年代	No.	遺跡名	出土点数（防長窯）	緑釉陶器の年代
1	名和衣装谷	1 (1)	9世紀後半	16	柄杓目Ⅰ	2	9世紀後半
2	因幡国府	125 (1)	9世紀前半～10世紀後半	17	伯耆国庁	9	9世紀前半～10世紀後半
3	栗本廃寺	1	10世紀初頭	18	丸山	1	
4	岩吉Ⅳ	27	9世紀中頃～10世紀初頭	19	楚里	1 (1?)	9世紀後半
5	高畑	?		20	大塚塚根	2	10世紀前半
6	天神山	1	9世紀中頃	21	茶畑六反田	2	9世紀中頃～9世紀後半
7	古市Ⅱ	3	10世紀前半～後半	22	坪田	1	
8	山ケ鼻	2	9世紀末～10世紀後半	23	寺池	1	
9	山ケ鼻Ⅱ	1	9世紀前半	24	目久美	2	9世紀後半
10	宮長竹ケ鼻	?		25	今在家	3	10世紀前半～中頃
11	佐貫上台	1	10世紀前半	26	米子城跡１	1	
12	高塚大将軍	1	10世紀後半	27	米子城跡21	1	
13	智頭枕田	10	9～10世紀	28	岸本大成遺跡	5 (1?)	9世紀末～10世紀初頭
14	上原南	1	9世紀後半	29	霞平ノ浜A	5	9世紀後半
15	会下・郡家	1	9世紀後半				

い地形を勘案し陸路、特に古代山陰道について言及する。名和町内における古代山陰道推定ルートについては、「和奈（奈和）」駅の遺称地とされる小字馬郡以東に直線道の痕跡が確認されており山陰道である蓋然性が高い。それ以西については、明確なルートを示唆した研究は無い。ただし、傾斜がきつく氾濫が繰り返されていたであろう阿弥陀川扇状地の扇端部を避け、扇央部に近い大山町平付近で渡河した可能性は指摘されている[3]。

この不明部分に関し、最近の調査において大きな手掛かりが得られた。茶畑六反田遺跡における、条里溝の調査である[4]。条里溝と推定される遺構は複数確認されているが、いずれも最新の遺物は10世紀前半に位置づけられている。周辺からは、それ以降の遺物が出土しており、少なくとも10世紀前半までには、一端、溝としての機能を失っていたものと考えている。これら条里溝と、その東で現地表面に残された痕跡等から推定される条里の間には、約30m幅の余剰帯が存在する。余剰帯については、道路に相当する例が多く報告されている。地方における駅路の場合15～20m幅の例が多く、出雲国では11～16m幅[5]、丹波国において約23m幅の余剰帯が古代山陰道と推定されている[6]。30m幅は例外的だが、以下のルート設定に注目したい。この余剰帯を南に延長すると孝霊山山頂へと連なる。古代道路の路線設定においては、山頂を目標として直線的に計画される例がいくつも報告されており[7]、今回の場合もこの例に当てはまる可能性がある。さらに、この余剰帯の延長線上で阿弥陀川を渡河した場合、阿弥陀川扇状地の扇央部を通り、渡河後90°西に屈曲し阿弥陀川扇状地南端を通ることとなる。これは最も地形的に安定したルート設定と言えよう。

以上のことから、今回検出した余剰帯は、古代山陰道である可能性が高い。勿論、別の規準による新たな条里が施工された結果、生み出された余剰帯である可能性もあろう。しかし、余剰帯から阿弥陀川扇状地の東端までは極わずかであり、余剰帯より西側のみ同方位の条里が施行されたとも考えにくい。したがって、古代山陰道については右の図のようなルートを推定しておきたい。また、周辺の条里遺構についても、古代山陰道が使用されている間に施工されたものと推定できる。

古代山陰道推定ルートは、国道9号線（名和淀江道路）の工事影響範囲内を通っており、今後の調査に期待したい。

第44図　古代山陰道推定ルート

3．名和衣装谷遺跡の性格

これまでの考察の結果、本遺跡の性格として、官衙や荘園の庄所、有力者の居宅、寺院といった可能性が指摘できた。以下で、さらに絞り込むこととしたい。

まず、郡衙の可能性については、本遺

跡の北西約900mに位置する長者原遺跡が注目される。この遺跡は、主軸をほぼ真北にとる礎石建物やこれに伴う区画溝、大量の炭化米が検出されており、郡正倉と考えられている[8]。正倉を含む郡衙域は、広いもので500～600m以上の例がある。県内でも気多郡衙と考えられている上原遺跡群では、郡庁から450m離れて、厨か館と考えられる建物群が検出されている。このような例はあるものの、900mは広すぎよう。また、ほぼ真北を向く長者原遺跡の遺構群とは異なり、本遺跡の建物や溝は、自然地形に規制され真北から約55°西に傾く。郡正倉と一体となった郡衙の一部である可能性は低い。駅については、前述の山陰道推定ルートから考えると内陸に入りすぎている。また、長者原遺跡の西隣に馬郡という小字が残っており、この周辺に「和奈（奈和）」駅の存在が推定されている。寺院に関しては、仏教的な遺物が調査区内から出土していないため、その可能性は低い。

出土遺物から考えた場合、出土した鉄滓に占める含鉄鉄滓の割合が58.3%と高率であることに注目したい。本遺跡の西に隣接する名和乙ヶ谷遺跡では32%であり、県内の他の遺跡もほぼ同様の数値を示している。含鉄鉄滓には鉄素材として流通していた可能性と、精錬鍛冶の可能性がある[9]。いずれにせよ、本遺跡において鉄の管理がなされていたと考えている。今回検出した硬化面も、これらに関連する遺構の可能性がある。本遺跡の南東約2.4kmに位置する上寺谷遺跡は奈良時代と推定されている製鉄遺跡である。その周辺には、同じく奈良時代の炭焼窯と推定される栃原窯跡や、時期不明の製鉄関連遺跡が集中している[10]。上寺谷遺跡と長者原遺跡を結ぶルートを考えた場合、本遺跡を通るルートが最短かつ、地形的にも無理がない。したがって本遺跡の占地形態は、鉄の生産地と、郡正倉や駅など郡の重要な施設の集まる地域とを意識したものと言える。鉄の管理をその機能の一つとしていた可能性が高い。具体的には、鉄を正倉に入れる前に集積や精錬、小鍛冶といった可能性を指摘できよう。『延喜式』には伯耆国の調物として鉄が挙げられており、郡においても重要な位置を占めていた可能性は高い。長門産緑釉陶器も、このような鉄を基盤とした経済力を背景として入手された可能性もあろう。

本遺跡は、10世紀初頭になると遺構・遺物共に存続が確認できなくなる。10世紀初頭は、古代史上大きな画期である。律令が変容し、国衙機構が強化され、それまでの支配体制を支えてきた郡司層が没落する。郡衙もこの時期を境に消えてしまう[11]。本遺跡もこの時期に消えるのは、郡司層との関わりが強かったからではないだろうか。

遺跡のごく一部を調査したのみであり、明確な性格付けは困難であるが、これまでの考察から、郡衙の下部機関や郡司層の居宅を、第1の候補としてあげておきたい。

註

1）掘立柱建物については山中敏史氏にご指導頂いた。掘立柱建物の評価は、山中氏のご教示に基づいている。

2）精舎に対する付属で、施設内において中心とならない建物。雑多な用途に使用される。

3）日野尚志「古代国の駅路について」『佐賀大学教育学部研究論文集』38－2、1991年

4）（財）鳥取県教育文化財団「茶畑六反田遺跡・押平弘法堂遺跡・宮岡横磨洞遺跡・安原溝尻遺跡」2002年
条里制が孝霊山を機軸として施行されたとすれば、淀江条里の南北里界線と東西方向で約100mのズレが生じる。淀江条里と阿弥陀川扇状地東側の条里が基本プランを異にする可能性もある。

5）中村太一『『出雲国風土記』の方位・里程記載と古代遺路』『出雲古代史研究』2、1992年

6）吉本昌弘「古代駅伝路における道代の幅員について」『古代交通研究』9、2000年

7）木下良「古代道路研究の現況」『古代交通研究』10、2001年

8）名和町誌編さん委員会「長者原遺跡」『名和町誌』名和町 1978年
名和町教育委員会『角塚遺跡・長者原遺跡発掘調査報告書』1994年
名和町教育委員会『長者原遺跡』1999年、名和町教育委員会『長者原遺跡』2000年

9）穴澤義巧氏のご教示による。

10）名和町教育委員会「名和町遺跡調査報告書」1984年

11）山中敏史「古代地方官衙の成立と展開」『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房、1994年

第４章　古御堂金蔵ヶ平遺跡の調査

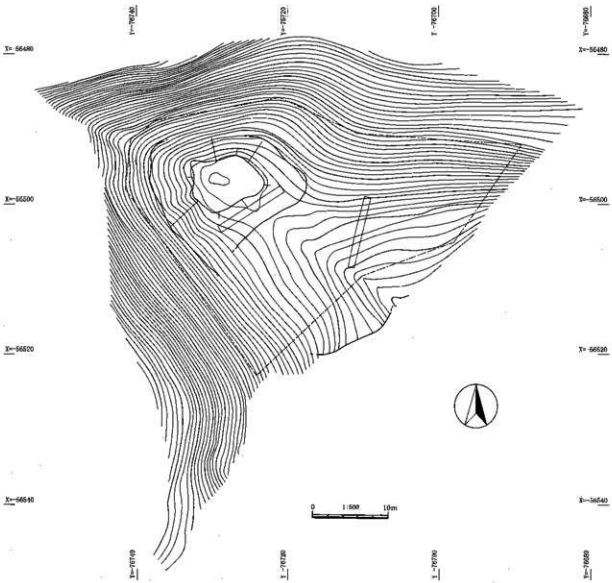
第１節　調査の概要

１．調査の概要

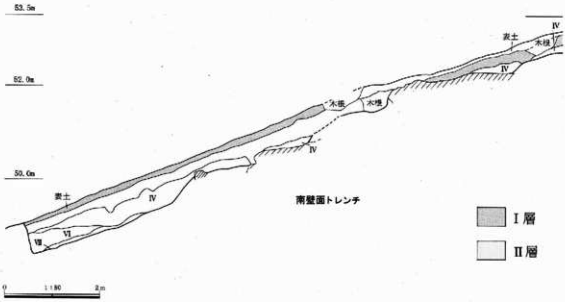
古御堂金蔵ヶ平遺跡は、大山から広がる扇状地にある。付近は人手状に丘陵が張り出しており、西隣の丘陵には古御堂笹尾山遺跡、さらに西隣には押平尾無遺跡、茶畑第１遺跡があり、いずれも弥生時代から古墳時代にわたる集落遺跡である。古御堂金蔵ヶ平遺跡も、丘陵の先端部に位置する。このような周囲の状況から、当初集落遺跡と考えられた。しかし、調査前の地形測量および範囲確認のために行った試掘調査の際に、表土下から黒色土～黒褐色土層が検出されており、これが旧表土の可能性があること、また調査前地形測量の結果、地形的に丘陵の先端部がやや盛り上がっていることなどから、古墳の可能性が想定された。そのため、丘陵の先端部については重機を使用せず、確認のためのトレンチを設定し、表土除去は人力によることとした。

２．調査の方法

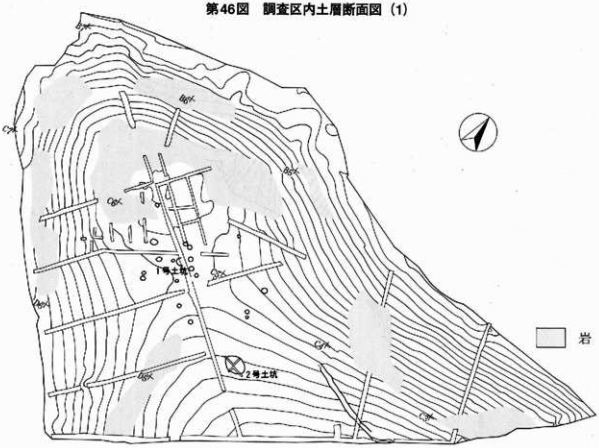
まず墳頂部を設定し、調査地の丘陵側を縦断する南北トレンチと、それに直交する東西トレンチを設定し、掘り下げを開



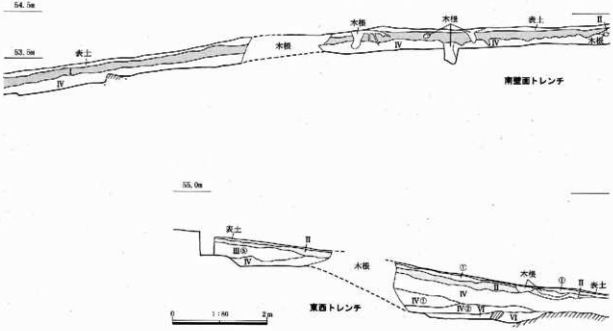
第45図　調査前地形測量図



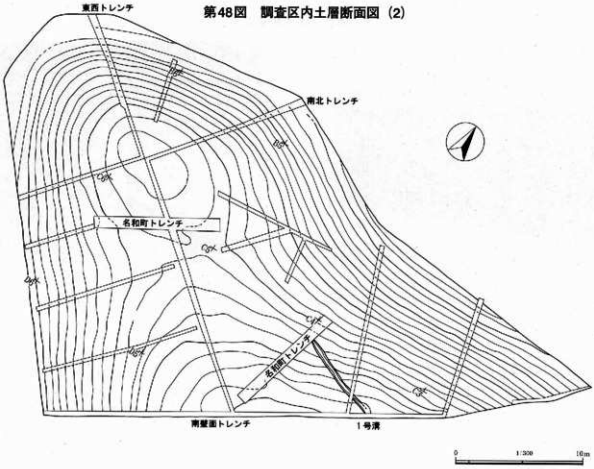
第46図　調査区内土層断面図（1）



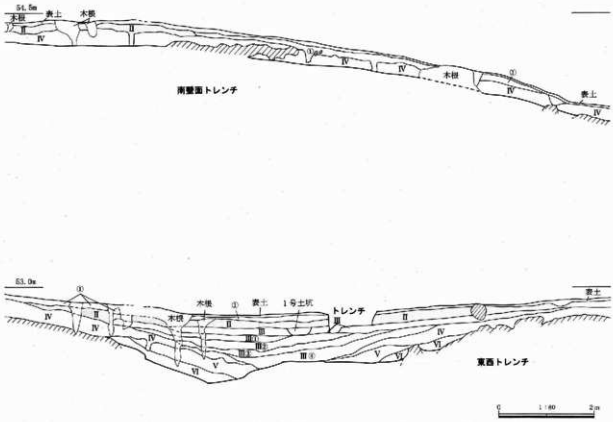
第47図　第2遺構検出面遺構分布図



第48図　調査区内土層断面図（2）



第49図　第1遺構検出面遺構分布図



第50図　調査区内土層断面図（3）

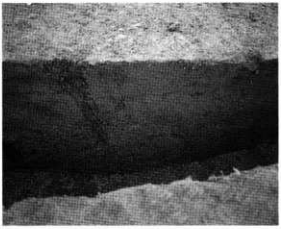


写真1　南北トレンチ中央付近

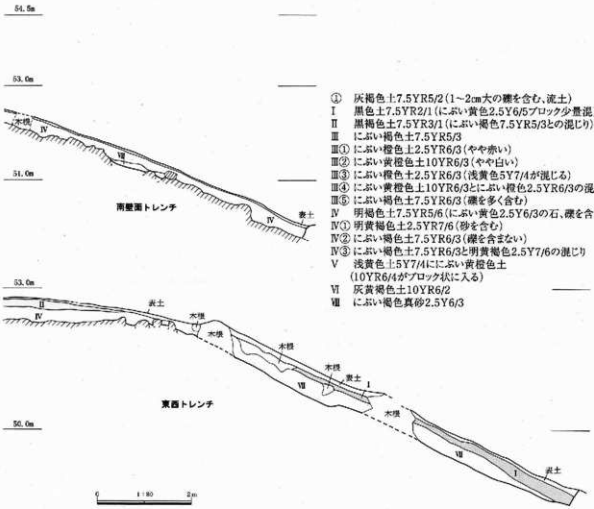
写真2　東西トレンチ中央付近

始した。その結果、周溝は確認できず、墳頂部として考えた位置にもサブトレンチを設定したが埋葬施設を確認することはできなかった。そのため、丘陵の先端部については古墳ではなく、自然地形による高まりであると判断した。

この時に、黒色土・黒褐色土から遺物が出土し、包含層であることが確認された。またその下面から土坑および小穴が検出され、遺構面が存在することを確認した。なお、調査外の南側の丘陵で、古墳の可能性がある高まりが認められた。これは丘陵頂部付近とその東側の斜面部に位置し、これが古墳とすると調査区内に周溝の北端部が存在する可能性が想定された。そのため調査区の南側に沿ってトレンチを設定したが、周溝を検出することはできなかった。

３．基本層序

調査地は北西方向に延びる丘陵の先端付近に位置する。丘陵の突端部がやや盛り上がり、尾根に向かいわずかに傾斜して狭い平坦部をなした後に丘陵に続く地形となる。表土の下には黒色土、その下には褐色のローム質の堆積があり、いく



第51図　調査区内土層断面図（4）

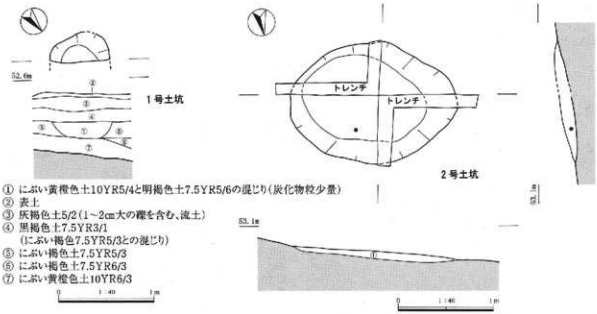
つかの広域火山灰とみられる層をはさんだ後、火砕流層となる。

黒色土は調査区の中央から東側斜面部にかけて堆積する。黒色を呈するのは腐食物の混入によるものとみられるが、土色は一定せず濃淡がみられ、西側に向かい徐々に淡くなり、暗褐色にちかくなる。調査の段階では色が異なるため、黒色土と黒褐色土の２層に分層しているが、層位的には連続している。この層の上面が第１遺構検出面で、１号溝を検出した。黒色土･黒褐色土の層はいずれも包含層である。

黒色土･黒褐色土の下の褐色のローム質の土の上面には、第２遺構検出面が存在する。ここから中世の土坑、小穴を検出した。この層の下には浅黄色土とにぶい黄橙色土がブロック状に混じる層がある。この層は姶良火山灰（AT：２万１千年前～２万５千年前）とみられるが、丘陵の落ち込んだ部分に船底状に堆積していることから、二次堆積と考えられる。丘陵を横断するトレンチによると、東西両斜面部の堆積は、火砕流の層の上にはAT層は存在していない。斜面部付近では、岩盤もしくは風化した真砂の上に黒色土あるいは流土が堆積している状況である。

調査地中央の狭い平坦面付近では、黒褐色土の下には灰黄褐色土があり、その下には火砕流層とそれが風化したにぶい褐色真砂層となる。この火砕流層は、丘陵を形づくる基盤となっている。上位にAT層が存在することから、名和火砕流層と考えられる。このような堆積状況は遺跡の東側に位置する名和衣装谷遺跡や名和乙ヶ谷遺跡、西隣に位置する古御堂笹尾山遺跡や茶畑第１遺跡などで確認されており、層位的にも矛盾しない。

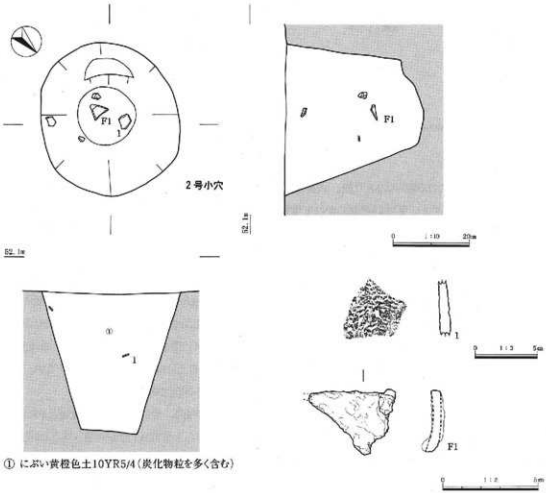
第２節　第２遺構検出面の調査



① にぶい黄橙色土10YR5/4と明褐色土7.5YR5/6の混じり(炭化物粒少量)
② 表土
③ 灰褐色土5/2(1～2cm大の礫を含む、流土)
④ 黒褐色土7.5YR3/1
(にぶい褐色7.5YR5/3との混じり)
⑤ にぶい褐色土7.5YR5/3
⑥ にぶい褐色土7.5YR6/3
⑦ にぶい黄橙色土10YR6/3

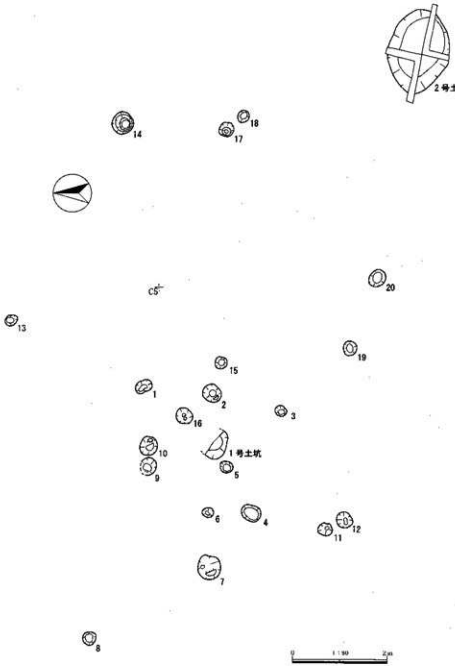
① にぶい黄褐色土10YR4/6(黒褐色土10YR3/1ブロック混)

第52図　1・2号土坑



① にぶい黄橙色土10YR5/4(炭化物粒を多く含む)

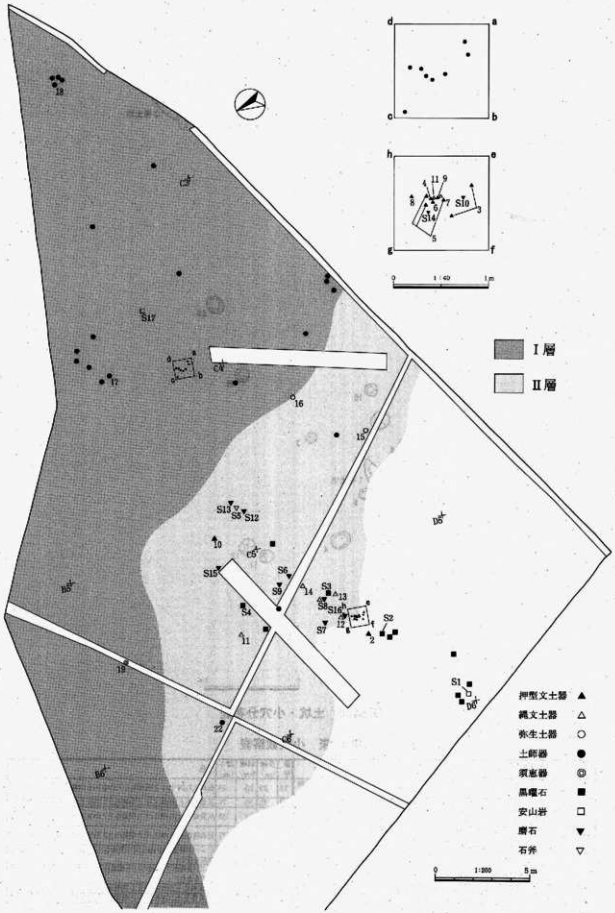
第53図　2号小穴および出土遺物



第54図　土坑・小穴分布図

第15表　小穴観察表

番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	土色	番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	土色
1	33	20～25	56	にぶい黄橙色十10YR3/4と明褐色十7.5YR5/6の混じり（炭化物粒を含む）	11	29	25	46	灰色土7.5Y1/4と明褐色土7.5YR5/6の混じり（ややもろい）
2	40	36	43	にぶい黄橙色十10YR3/4（炭化物粒を多く含む）	12	35	32	75	灰黄褐色十10YR2/6と明褐色土7.5YR5/6の混じり（もろい）
3	25	24	12	にぶい黄橙色十10YR3/4と明褐色十7.5YR5/6の混じり（炭化物粒あり）	13	28	24	25	灰黄褐色土10YR2/6と明褐色土7.5YR5/6の混じり（もろい）
4	43	33	17	にぶい黄橙色十10YR3/4と明褐色十7.5YR5/6の混じり（炭化物粒あり）	14	46	44	71	灰黄褐色十10YR2/6と明褐色土7.5YR5/6の混じり（もろい）
5	27	24	13	にぶい黄橙色上10YR3/4と明褐色十7.5YR5/6の混じり（炭化物粒あり）	15	27	25	12	にぶい黄橙色上10YR5/4と明褐色十7.5YR5/6の混じり（炭化物粒を含む）
6	21	20	53	灰褐色十10YR2/3（もろい）	16	37	33	20	にぶい黄橙色上10YR5/4と明褐色十7.5YR5/6の混じり（炭化物粒を含む）
7	59	48	75	灰色土7.5Y1/4と明褐色上7.5YR5/6の混じり（ややもろい）	17	34	32	39	灰黄褐色土10YR2/6と明褐色上7.5YR5/6の混じり
8	28	27	8	褐灰色上10YR1/4と明褐色上7.5YR5/6の混じり（ややもろい）	18	27	25	39	灰黄褐色上10YR2/6と明褐色上7.5YR5/6の混じり
9	38	(35)	16	にぶい黄橙色十10YR5/4と明褐色土7.5YR5/6の混じり	19	30	28	32	褐灰色土10YR1/5と明褐色上7.5YR5/6の混じり（炭化物粒少量）
10	39	35	30	にぶい黄橙色土10YR3/4と明褐色土7.5YR5/6の混じり（炭化物粒を含む）	20	39	33	33	褐灰色土10YR1/5と明褐色土7.5YR5/6の混じり（5㎜大のむあり）



第55図　包含層遺物出土図

1号土坑（第52図、図版19－１・３）

Ｃ５グリッドに位置する。黒褐色土を除去した後、Ⅲ層の上面で検出できた。平面形はやや不整な円形、断面形はやや深い皿状を呈する。北西－南東方向にトレンチを入れた際に遺構の北東部を掘削した。付近は小穴の分布する中心付近に位置する。

2号土坑（第52図、図版20－１・21－１）

Ｃ４グリッドに位置する。周辺は北下がりの斜面部で、周辺に遺構は確認できていない。平面形はやや不整な楕円形、断面形は浅い皿状を呈する。遺物は土師器の小片が１点出土している。小穴よりも南東方向にあり、北下がりの斜面地に位置する。検出面、埋土は小穴と類似する。

第３節　第１遺構検出面の調査

1号溝（第56図、図版20－３）

Ｃ３グリッドに位置する。検出面は黒色土の上面である。幅は37～48㎝、深さは最大で23㎝を測る。調査区の東から西方向に、Ｎ－72°－Ｗの方向に下る。わずかに南側に湾曲するもののほぼ直線状で、長さ７ｍまで検出したが、それよりも北側は遺存状況が悪く検出ができなかった。埋土は褐灰色土の１層で、かなりもろい。断面は船底状である。埋土が類似する遺構は確認できていない。遺物は土師器片が１点出土したが図化し得ない。黒色土の上面での検出あることから、中世よりも新しい時期である。埋土はかなりもろいため、時期がかなり下ることも考えられる。

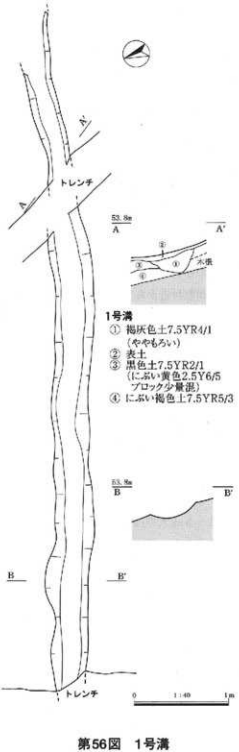
小穴（第54図、第15表、図版20－１・21－１）

Ｂ４～Ｃ５グリッド付近に位置する。付近は北下がりの斜面と、丘陵の先端部のやや高く盛り上がる部分との中間付近で、周囲はほぼ平坦である。20基の小穴を検出した。直径は30～40㎝前後が多く、深さは浅いもので８㎝、深いものは75㎝で、一定しない。遺物が出土したのは２号小穴のみである。名和町の試掘調査でも小穴が確認されている。

埋土はにぶい黄橙色土や灰黄褐色土で、比較的しまっており、若干の炭化物を含んでいる。柱痕を確認したものはない。多少の埋土の違いはあるものの、いずれも黄橙色系の土色で、遺構検出面も同一であることから、これらの小穴は同時期に存在したと考えられる。掘立柱建物が存在していた可能性も否定できないが、並ぶものは確認していない。

2号小穴（第53図、図版20－２・21－２・22－１）

Ｃ５グリッドに位置する。直径36～40㎝、深さは43㎝を測る。遺物は縄文時代の押型文土器１点、黒曜石の剥片が１点、弥生土器もしくは古墳時代の土師器片が１点、鉄製品Ｆ１が出土した。いずれも底面から浮いた状況で出土している。このうち、図化し得たのは押型文土器１と



第56図　1号溝

第16表　包含層遺物一覧表

	押型文	縄文	弥生	土師器	須恵器	黒曜石	安山岩	磨石	石斧
掲載記号	▲	△	○	●	◎	■	□	▼	▽
表土		1		1		4			
Ⅰ層	1		1	54	1	2	1		
Ⅱ層	11	8	1	1		4		11	1
遺構検出面上	1					8	1		
合計	13	9	2	56	1	18	2	11	1

鉄製品Ｆ１である。１は外面に山形文を施す。縄文時代早期の黄島式に相当する。

Ｆ１は鉄鍋の破片で、鎌倉もしくは室町時代のものと考えられる。付近からは中世遺物は出土していないが、遺構内からの出土であることから、２号小穴は鎌倉もしくは室町時代以降のものと考えられる。

第４節　包含層出土遺物

第２遺構検出面（第55・57図、第16表、図版18－２・３・19－２・21－２）

第２遺構検出面上からの出土した遺物である。Ｃ５グリッド北東付近から北西にかけて上位から流出したような状況を呈している。押型文土器１点、安山岩の石鏃１点、黒曜石の剥片８点があり、このうち押型文土器２は、黒褐色土包含層と同じ黄島式のもので、繊維の脱痕が認められる。Ｃ５グリッド中央から南東隅付近で黒曜石の剥片が集中して出土している。石鏃Ｓ２は不整な石鏃で、連続する調整痕があり、未製品の可能性がある。黒曜石の原石の一部Ｓ４も出土していることから、付近で石器を加工していたことも考えられる。

黒褐色土包含層（第55・57・58図、第16表、図版21－２・22－２・３）

調査区の中央付近に堆積し、黒色土よりも明るい層である。遺物は、Ｃ５グリッド北東杭を中心とする、丘陵のほぼ平坦部付近から東西方向に向かう斜面の谷部に沿うように出土している。押型文土器11点、縄文時代の土器５点、弥生土器１点、土師器２点、石斧１点、黒曜石４点、磨石11点で、縄文時代早期の遺物がほとんどである。押型文土器３～11は、Ｃ５グリッド中央、平坦部から西側の緩い斜面部で集中して出土している。いずれもポジティブな楕円形の押型で、１つの楕円文の原体は概ね長軸が５～７㎜、短軸は２～４㎜程度で、縦方向の施文で、内面は横方向の粗いナデを施す。焼成は良好で、概ね明るい橙色を呈する。胎土は１～３㎜大の砂粒を含み、１～２㎜程度の白色の砂を含むものや、５・６・９・10のように繊維の脱痕が認められるものもある。４は内面にも横方向の押型文が施されており、口縁部付近とみられる。内面の原体は、長軸が約８㎜、短軸が約４㎜で、外面の６㎜×３㎜に対し一回り大きい。５は上部に縦方向の施文後、下部の一部に横または斜め方向に施文がなされており、器壁も下部が11㎜程度と厚いことから、底部付近とみられる。いずれも縄文時代早期の黄島式のものである。10の原体は長軸が12㎜、短軸が８㎜で、２～10よりも一回り大きく、縦方向に施文される。胎土には２～５㎜大の白色砂・礫が多く、繊維の脱痕がわずかにみられる。楕円文が大きく、縄文時代早期の高山寺式に該当する。11も押型文土器とみられるが、原体ははっきりとしない。

石製品は、押型文土器よりもやや北西部の平坦面付近に散在する。黒曜石の石鏃Ｓ３、原石の一部Ｓ４、磨製の石斧Ｓ５、磨石Ｓ６～16がある。Ｓ３は隠岐産と考えられる。磨石の使用痕跡は不明瞭であるが、出土位置や層位的にみても押型文土器と同じ縄文時代早期に該当すると考えられる。石材は安山岩で、弥山火砕流の範囲内のものであろう。黒雲母、角閃石、斜長石などが点在し、表面には鉱物の抜けた痕跡がみられる。

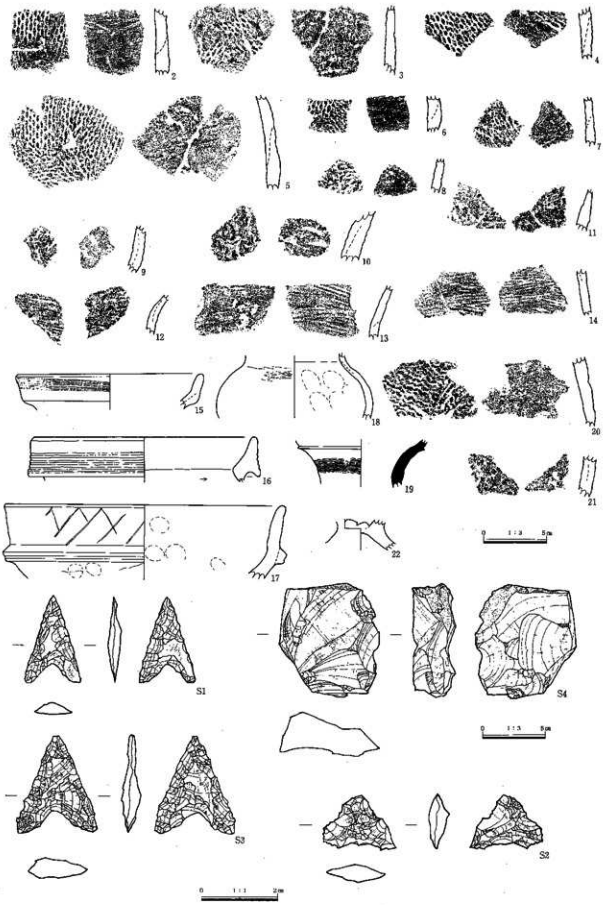
黒色土包含層（第55・57・58図、第16表、図版21－２・22－３）

丘陵の頂部より東側の斜面地付近に黒色土が堆積しており、これが遺物包含層である。遺物は20の押型文土器１点、16の弥生土器１点、安山岩製の掻器Ｓ17、隠岐産とみられる黒曜石の剥片２点など縄文時代の遺物も含まれるが、主体となるのは土師器56点、須恵器１点の古墳時代後期の遺物である。

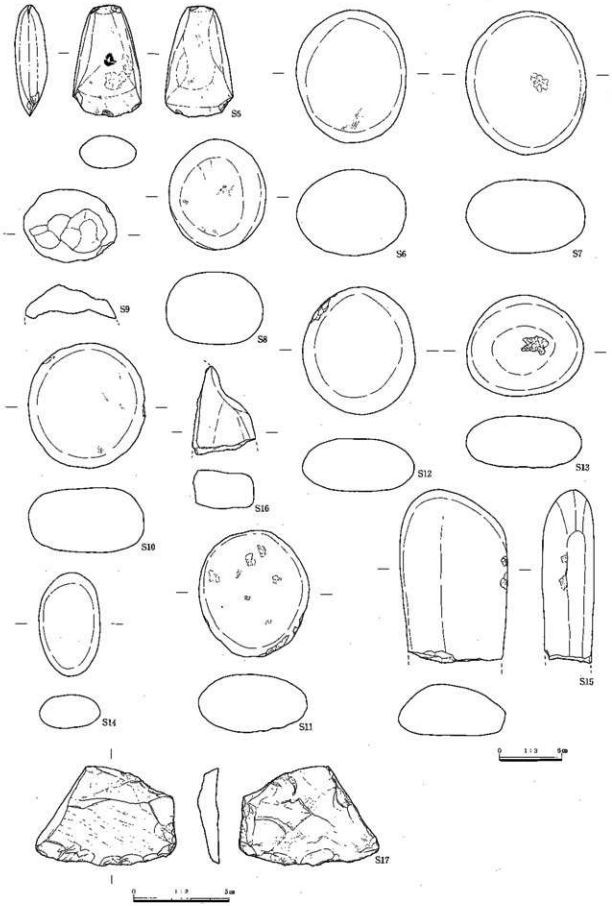
これらはいずれも西側の斜面部に散在しており、丘陵の先端部からというより、むしろ南西部の丘陵からの落ち込みが考えられる。弥生土器の甕15は、弥生時代後期である。土師器の壺17、小型壺18はいずれも古墳時代後期で、17の形状から壺棺としての使用も考えられる。谷を挟み西隣の丘陵に位置する古御堂笹尾山遺跡では、同時期の集落が展開している。したがって当遺跡の南側に古墳時代中期から後期にかけての集落あるいは古墳が存在していた可能性が指摘できよう。

第５節　大山山麓の押型文土器について

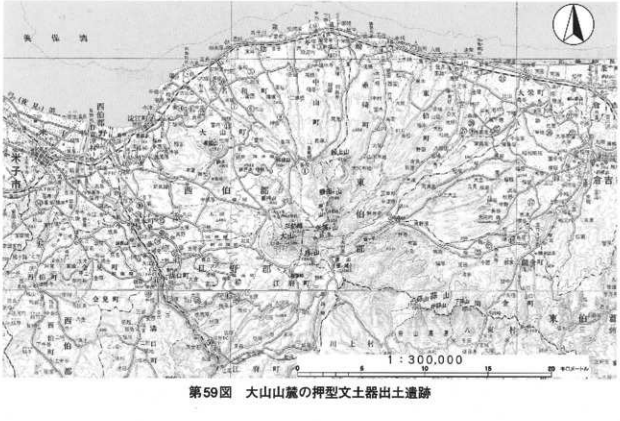
鳥取県内の押型文土器が出土する遺跡は、1991年に久保が集成している（久保1991）。この時点では37遺跡であったものが、それ以降出土する遺跡数は増加しており、大山山麓だけで51遺跡、県内54遺跡にのぼる。押型文



第57図　包含層出土遺物（1）



第58図　包含層出土遺物（2）



第59図　大山山麓の押型文土器出土遺跡

土器の分布は、県内でも大山山麓に分布が著しく、近年調査された遺跡においてもその傾向は変わらない。今回調査を行った古御堂金蔵ヶ平遺跡は、大山の北西麓に位置しており、周辺からも押型文土器が出土する地域にある。

大山の周辺をみると、押型文土器が集中して出土する地域は、大山北東・南東麓では倉吉市・関金町・大栄町・東伯町から、南西麓では米子市・岸本町・溝口町・江府町・日南町、大山北西麓では中山町・名和町・大山町・淀江町である。

大山北東麓では、大山を取り巻くように、南側は中国山地に達しており、これらの丘陵と平野の境にある。ただし、取木遺跡や大谷（築山）遺跡のように平野の中に位置する独立する低丘陵にある遺跡もみられる。取木遺跡からはネガティブな押型文土器が出土しており、礫群や住居跡も確認されている。

大山南西麓では、上福万遺跡をはじめ、長山馬籠遺跡や井後草里遺跡など、まとまって出土する遺跡と少数ながら出土する遺跡が散在する。土坑や竪穴状遺構などの調査も行われている。

大山北西麓に位置する中山・名和・大山・淀江の４町では、中山町で４遺跡、名和町では今回調査が行われた古御堂金蔵ヶ平遺跡も含め６遺跡、大山町で４遺跡、淀江町で１遺跡の計15遺跡から出土している。しかしいずれの遺跡においても１点もしくは数点程度であり、比較的まとまって出土している遺跡は、名和町の蛇居谷遺跡と今回調査を行った古御堂金蔵ヶ平遺跡である。蛇居谷遺跡からはネガティブな山形文、楕円文をもつ破片が10点採集されている。古御堂金蔵ヶ平遺跡からは楕円形の押型文８点、山形の押型文１点、黄島式のものは８点、高山寺式のものが１点認められている。ただし両遺跡ともに遺構が確認されておらず、様相は不明瞭である。

北西麓の様相は、岩伏し遺跡が標高670m程あり、それ以外の遺跡は標高200～275m程の位置にあるほかは、ほとんどが比較的海岸部に近い標高100m以下の丘陵から出土している。また、いずれの遺跡も小河川の水系に分布域を追うことができ、遺跡は平野部から大山に向かい扇状に分布している。ネガティブな押型文土器の出土する遺跡も多い。

このように大山山麓周辺の押型文土器を出土する遺跡の多くは、大山を取り巻くように位置しており、北西麓から南西麓にかけては、北東麓よりも密度が高い。また多くの遺跡からは数点から10点未満の出土で、遺構が確認できていない点も共通している。ただし近年の調査数の増加に伴い、確実に資料は増加しており、今後の調査

の進展が期待される。

参考文献

久保穣二朗　1991　「鳥取県出土の押型紋土器の様相」『鳥取県立博物館研究報告』第28号

山陰考古学研究集会　2001　『第28回山陰考古学研究集会　山陰の縄文時代遺跡』

鳥取県埋蔵文化財センター　1988　『旧石器・縄文時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財シリーズ3

米子市　1999　『新修米子市史』第七巻資料編考古原始・古代・中世

第17表　大山山麓の押型文土器出土遺跡

	所土地			遺跡名	点数	施文	形式名	主な遺構	文献
大山山北麓	中山町	松河原	①	妙伝し遺跡	—	楕円	—	—	鳥取県教育委員会　1978 『大山山麓遺跡群調査報告書』3
		遺伝寺	②	蛇ガ渕5遺跡		楕円	—	—	
		赤坂	③	石竹原遺跡		楕円	—	—	中山町教育委員会　1992 『石竹原遺跡発掘調査報告書』
			④	石坂谷口山遺跡		山形	—	—	中山町教育委員会　2000 『赤坂地区遺跡』
	名和町	角塚	⑤	角塚遺跡	1個体	楕円	高山寺式	—	名和町教育委員会　1983 『大仙道西遺跡発掘調査報告書』
		加茂	⑥	上大山第1遺跡	数点	楕円	貫線式 高山寺式	—	鳥取県教育委員会　1975 『改訂鳥取県遺跡地図』第3分冊
		高田	⑦	高田第4遺跡	数点	楕円	—	—	
		倉谷	⑧	能谷谷遺跡	10	四角円 山形 楕円	—	—	久保　1991
				能谷谷地内	2	楕円	—	—	
		茶屋	⑨	赤樹六反田遺跡	1	不明撚 内面縄行 波線	—	—	(財)鳥取県教育文化財協　誠土文遺跡発掘調査事務所　2002.3『名畑六反田遺跡　西ヶ谷遺跡　茶屋遺跡群調査報　文化遺産遺跡』
		古茶屋	⑩	古茶屋金鶏ケ平遺跡	9	山形　楕円	貫線式　高山寺式	—	未報告書
大山町	花田	花田	⑪	海田遺跡	数点	山形	—	—	大山町教育委員会　1979 『鳥取大山町海田遺跡』大山町南麓文化財発掘調査報告書1
			⑫	花田1号窯	1	楕円	高山寺式	—	大山町教育委員会　2000 『大山町内遺跡発掘調査報告書』 大山南麓遺跡
				花田地蔵都	4	山形　楕円	—	—	大山町教育委員会　1981 『大山町文化財調査報告書18集
	蔵岡	蔵岡	⑬	蔵岡第1遺跡	—	楕円	—	—	大山町教育委員会　1981 『蔵岡第一・蔵岡第二・上野第二遺跡』 大山町埋蔵文化財発掘調査報告書集
		妻木	⑭	大道原遺跡	—	楕円	—	—	倉ヶ市古文化財愛護　1958 『ひすい53号
淀江町	小波	小波	⑮	百塚第7遺跡(8区)	1	楕円	—	—	財団法人鳥取県教育文化財協　誠土文遺跡発掘調査事務所　1995 『百塚第7遺跡(8区)』
大山北麓・南麓橋	倉吉市	欠木	⑯	欠木遺跡	1個体	四角円	大川式	住居1　炉跡2	倉吉市教育委員会　1983 『倉吉市内遺跡分布調査報告書』 倉吉市文化財報告書第33集
		鴨河内	⑰	天神野遺跡(中田地区)	—	山形　楕円	—	焼石群	倉吉市教育委員会　1983 『倉吉市内遺跡分布調査報告書』 倉吉市文化財報告書第33集
	倉吉市	北谷	⑱	野口遺跡B地区	—	山形　楕円	—	—	倉吉市教育委員会　1992 『発掘古墳群発掘調査報告書』
		上市川	⑲	後口野1号墳	4	楕円	—	—	倉吉市教育委員会　1991 『後口野1号墳発掘調査報告書』
		上神	⑳	勉墓内墳群	2	楕円　山形	—	—	倉吉市教育委員会　1992 『勉墓古墳群発掘調査報告書』
		上神	㉑	国山遺跡	—	押型文	—	—	倉吉市　1996『倉吉市史』
	岡金町	小西	㉒	天神原遺跡	1	楕円	—	—	岡金町教育委員会　1988 『岡金町内遺跡群発掘調査報告書』IV　岡金町文化財調査報告書第12集
	大栄町	巻久保	㉓	巻久保遺跡	—	楕円	—	—	久保　1991
		大谷	㉔	大谷(亀山)遺跡	1個体	楕円	高山寺式	—	大栄町教育委員会　1977 『大栄地域遺跡群分布調査報告書』
	大栄町	上横倉	㉕	上横倉6遺跡	1	山形	—	—	大栄町教育委員会　1985 『上横倉6遺跡発掘調査報告書』大栄町文化財調査報告書　第13集
	東伯町	西高尾	㉖	西高尾谷遺遺跡	5	山形　楕円	—	—	大栄町教育委員会　2000『西高尾遺跡群谷遺跡発掘調査報告書』
		法万	㉗	法万3号墳(下層)	12	山形　楕円	—	—	東伯町教育委員会　1980 『大法13号(下層)谷地1号墳発掘調査報告書』
	東伯町	高瀬	㉘	森藤第2遺跡	2	楕円	—	—	東伯町教育委員会　1987 『高瀬谷1・谷2遺跡発掘調査報告書』 東伯町文化財発掘調査報告書第10集
米子市	上福万ほか	上福万	㉙	石州府古墳群	約10,500点	四押型　格子目 山形　楕円　櫛形	神宮寺式～高山寺式	竪石・土坑2・96墓	鳥取県教育文化財協　1986 『上福万遺跡』I
				上福万遺跡					鳥取県教育文化財協　1986 『上福万遺跡』II
	彦	㉚	彦中神・彦前田遺跡	14	山形　楕円	—	—	—	財団法人鳥取県教育文化財協　建設省倉吉工事事務所　1994 『彦中神・彦前田遺跡』
	福島	㉛	福島南雑畑山遺跡	4	山形　楕円　内面に絡行波線	—	—	—	財団法人鳥取県教育文化財協　建設省倉吉工事事務所　1994 『福島南雑畑山遺跡・尾高古墳群』
	新山	㉜	新山山田遺跡	2	菱形か　内面に絡行波線	—	—	—	財団法人鳥取県教育文化財協　1994『富塚・梅柳出』
		㉝	新山銀石山遺跡	—	—	—	—	—	
大山西麓	久古	㉞	北田山遺跡	29	四角円　格子目 山形　楕円　櫛形	神宮寺式	—	—	鳥取県埋蔵文化財センター　1984 『鳥取県文二ハ・ス』No9
	岸本	岸原	㉟	神ヶ原遺跡	24	四角円　格子目 山形	神宮寺式	—	鳥取県教育文化財協　1984 『久古第3遺跡・岸田原遺跡・神ヶ原遺跡発掘調査報告書』 鳥取県教育文化財協15
		岸田	㊱	岸田遺跡	—	—	—	—	亀井　人　1972 『鳥文研代の遺跡と文化』『鳥取郷土』 郷土史代
	久古	久古	㊲	久古第3遺跡	—	—	—	—	鳥取県教育委員会　1977 『大山西麓開発文化財分布調査報告書』
	巻原	巻原	㊳	巻原第1遺跡	—	—	—	—	鳥取県教育委員会　1975 『改訂鳥取県遺跡地図』第5分冊
	岸本	岸本	㊴	岸本ア遺跡	—	四楕円　山形　楕円	神宮寺式～高山寺式	—	久保　1991
				岸本ア／遺跡	11	格子目　山形　楕円	—	—	岸本町教育委員会　1997 『岸本ア／遺跡発掘調査報告書』
	金屋町	梅田	㊵	梅田上ノ山遺跡	2	山形　楕円	—	—	金屋町教育委員会　2001 『梅田上ノ山遺跡発掘調査報告書』
	西伯町	福成	㊶	法木谷遺跡	約20	山形	貫殖～高山寺式	—	西伯町教育委員会　1992 『法木谷遺跡』
淀山麓	上野・淀地谷	上野	㊷	下山神遺跡	5	山形　楕円	—	集石1　土壙1	鳥取県教育文化財協　1986 『下山神遺跡』
	長山	長山	㊸	長山第1遺跡	32	四押型　格子目	神宮寺式	上坑　集石　大状遺構　石	淀江町教育委員会　1985 『長山第1遺跡発掘調査報告書』
		長山	㊹	長山第2遺跡	75	山形　楕円			淀江町教育委員会　1989 『長山第2遺跡』
	大浦	中浦	㊺	中浦小屋遺跡	40	山形　楕円	—	—	淀江町教育委員会　1982 『上中ノ原・井倉東里遺跡発掘調査報告書』淀江町埋蔵文化財報告書2集
	大浦	上中ノ原	㊻	上中ノ原遺跡	1	楕円	高山寺式	—	
	海潮	海潮	㊼	海潮第1遺跡	—	山形	—	—	淀江町教育委員会　1988 『海潮第1遺跡発掘調査報告書』淀江町埋蔵文化財報告書4集
	大倉	大倉	㊽	海上原遺跡	1	山形	高山寺式	—	淀江町教育委員会　1990 『一部野遺跡発掘調査報告書』淀江町埋蔵文化財報告書7集
	宇代	宇代	㊾	一部野遺跡	1	山形　楕円	—	—	
江府町	俣川	俣川	㊿	俣川第1遺跡	—	楕円	—	—	鳥取県教育文化財協　1986 『俣川遺跡群』鳥取県教育文化財協報告書20
			(51)	俣川ケ城遺跡	—	山形	—	—	

※　久保1991・山陰考古学研究集会2000より作成(一部追加)

観察表凡例

a．器　種　　縄：縄文土器（押：押型文土器　粗：粗製土器）　弥：弥生土器　土：土師器　須：須恵器
　　緑：緑釉陶器　須恵器・土師器で有台とつかないものは無台であることを示す。

b．法　量　　口径・底径の（　）内数値は復元値を示し、器高の（　）内数値は残存高あるいは復元値を示す。

c．色　調　　内外面とも同色のものは、1行で示した。

d．調　整　　回転ナデ：ナデ　回転ヘラケズリ：ケズリ

e．使用痕　　摩：摩耗　煤：煤付着

f．部　位　　台：高台部　口：口縁部　底：底部　体：体部　天：天井部　内：内面　外：外面

第18表　名和衣装谷遺跡出土土器観察表（1）

図	No.	遺構・層位	器種	地区	法量(cm) 口径	底径	器高	色調 外	内	調整 内	外	備考	実測No.
16	1	Ⅲ層	縄・深鉢	J11			(4.2)	にぶい橙		ナデ	ナデ 指押さえ	外:条痕文	E7
20	2	2号掘立柱建物 柱穴4	土・杯	I10		(6.6)	(0.6)	褐灰 にぶい橙		ナデ 指頭圧痕	ナデ	回転ヘラ切り	H11
21	3	2号掘立柱建物 柱穴3	土・杯	I9	(12.6)	(8.2)	3.9	橙		ナデ	ナデ		H3
	4	2号掘立柱建物 柱穴3	土・有台杯	I9	(14.8)	6.7	5.3	橙		ナデ	ナデ	底外:板圧痕 台底:摩	H2
	5	2号掘立柱建物 柱穴8	須・杯	I9	(12.2)	6.4	3.9	橙		ナデ	ナデ	全体的に摩耗 口:打ち欠き 回転糸切り	PS5
	6	2号掘立柱建物 柱穴15	須・杯	J10	(12.6)	7.3	4.3	灰白～浅黄橙 浅黄橙		ナデ	ナデ	体内:摩 回転糸切り	PS4
22	7	19号土坑	土・杯	H10		7.0	(2.0)	橙		ナデ 指頭圧痕	ナデ	底外:板圧痕	H6
	8	19号土坑	須・杯蓋	H10	(15.4)		(2.2)	灰白		ナデ	ナデ	口:重ね焼き痕	PS7
23	9	22号土坑	須・杯	I12	(11.6)	(7.6)	4.2	灰～にぶい黄 にぶい黄～黄灰		ナデ	ナデ	回転糸切り	PS15
	10	22号土坑	須・杯	I12		(8.4)	(1.6)	灰 にぶい黄～灰		ナデ	ナデ	回転糸切り	PS16
	11	22号土坑	須・杯	I12		(8.8)	(1.4)	灰オリーブ 灰		ナデ	ナデ	口:打ち欠き 回転糸切り	PS6
	12	22号土坑	土・甕	I12	(21.8)		(3.5)	にぶい黄橙		ナデ ケズリ	ナデ ケズリ	外:煤・摩	H15
24	13	1号溝	須・横瓶	K11			(4.6)	灰		当て具	タタキ カキ目		PS11
25	14	3号溝	須・杯	J12		(9.4)	(1.4)	灰白		ナデ	ナデ	体外:摩耗 回転糸切り	PS8
27	15	3号小穴	土・杯	H10	(12.2)	(6.8)	3.2	橙		ナデ	ナデ	底内:摩	H5
	16	3号小穴	須・杯	H10		(10.2)	(1.5)	灰白～浅黄 にぶい黄～灰白		ナデ	ナデ	体外:摩 回転糸切り	PS10
	17	3号小穴	須・転用硯	H10	14.0	8.2	2.2	灰白		ナデ	ナデ	底内:摩 皿転用 回転糸切り	PS1
	18	4号小穴	土・有台杯	I10	(15.4)		3.9	浅黄橙 橙		ナデ	ナデ	口内外:灯明芯痕	H10
	19	5号小穴	須・杯	I10	(15.2)		(2.4)	灰 にぶい黄橙		ナデ	ナデ	口:重ね焼き痕	PS9
	20	6号小穴	土・甕	J9	(32.0)		(3.9)	灰褐 橙		ナデ	ナデ	体外:煤	H12
	21	7号小穴	須・杯	J10	(7.9)		(2.9)	灰 灰白～灰		ナデ	ナデ	口:重ね焼き痕	PS12
	22	7号小穴	土・甕	J10	(26.0)		(10.5)	にぶい橙 橙		ナデ ケズリ	ナデ ケズリ	内外:煤	H9
	23	8号小穴	須・椀	H10	(17.6)		(6.4)	灰		ナデ	ナデ	口:重ね焼き痕 底内:重ね焼き 融着痕	PS30
	24	9号小穴	須・有台皿	H10		(7.8)	(1.4)	緑黒～オリーブ灰 オリーブ灰		ナデ	ナデ	内:自然釉 回転糸切り	PS13
28	25	Ⅱ層	縄・深鉢	I11			(3.5)	淡黄		ナデ	縄目 指頭圧痕	縄文	E4
	26	Ⅱ層	縄・深鉢	J11			(5.6)	橙		ケズリ ナデ	ナデ	外:条痕文	E3

第19表　名和衣装谷遺跡出土土器観察表（2）

図	No.	遺構・層位	器種	地区	法量(cm) 口径	底径	器高	色調 外 内	調整 内	調整 外	備考	実測No.
28	27	Ⅱ層	土・器台	J10			(8.0)	褐灰～にぶい黄橙 褐灰	ケズリ ナデ	ナデ		H19
	28	Ⅱ層	須・杯	J11	(13.8)		(3.1)	灰～灰褐 黒～灰	ナデ	ナデ	口:自然釉	PS18
	29	Ⅱ層	須・杯	I11	(15.2)		(5.3)	暗灰～オリーブ灰 灰～灰オリーブ	ナデ	ナデ		PS 2
	30	Ⅱ層	須・杯	I9	(14.0)		(3.6)	灰	ナデ	ナデ		PS25
	31	Ⅱ層	須・杯	I12	(13.0)		(3.1)	灰白～灰黄 灰	ナデ	ナデ		PS22
	32	Ⅱ層	土・杯	I8	(10.6)	7.0	3.9	橙～褐灰	ナデ	ナデ	内:煤 底外:板圧痕	H31
	33	Ⅱ層	土・杯	I8		7.0	(1.5)	明赤褐	ナデ 指頭圧痕	ナデ	底外:板圧痕	H26
	34	Ⅱ層	土・杯	I8	(12.0)	(7.0)	3.5	明褐	ナデ	ナデ	底外:板圧痕	H 1
	35	Ⅱ層	土・有台杯	I10		(9.0)	(2.2)	淡赤橙 灰白	ナデ	ナデ		H23
	36	Ⅱ層	土・有台杯	I10		(8.8)	(2.3)	浅黄橙	ナデ	ナデ		H32
	37	Ⅱ層	土・有台杯	I8	(13.4)	7.4	(4.4)	橙	ナデ	ナデ	底外:板圧痕	H 4
	38	Ⅱ層	土・有台杯	J10		6.4	(4.2)	にぶい黄橙～褐灰 褐灰	ナデ	ナデ		H22
	39	Ⅱ層	土・有台杯	J10		(7.8)	(1.6)	灰 にぶい赤褐	ナデ	ナデ	底内:赤彩 回転糸切り	H20
	40	Ⅱ層	土・有台杯	J11		(6.2)	(2.1)	浅黄橙	ナデ	ナデ	内底:摩	H16
	41	Ⅱ層	土・杯	K11	(13.6)		(2.3)	橙	ナデ	ナデ	口:摩 外:赤彩	H27-1
	42	Ⅱ層	須・杯	I11	(11.8)	(6.6)	3.8	灰白～灰 灰白	ナデ	ナデ	底外:工具痕 底内:指押さえ痕 回転糸切り	PS21
	43	Ⅱ層	須・杯	I10	(12.7)	(7.0)	3.7	灰白	ナデ	ナデ	口:自然釉 回転糸切り	PS39
	44	Ⅱ層	須・皿	J10	(13.4)	(7.4)	1.4	灰	ナデ	ナデ	底外:板圧痕 回転糸切り	PS23
	45	Ⅱ層	緑・有台皿	I10		(8.0)	(1.6)	オリーブ灰	ミガキ	ミガキ	内外:施釉 台底:施釉剥離 回転糸切り	E 1
29	46	Ⅱ層	土・甕	I10	(28.8)		(10.1)	にぶい黄橙～黒 にぶい橙	ケズリ	ナデ	外:煤	H30
	47	Ⅱ層	土・甕	J11	(32.0)		(13.3)	橙	ナデ	ナデ	体外:煤	H21
	48	Ⅱ層	土・甕	J10	(39.0)		(7.3)	灰黄～黄灰	ナデ ケズリ	ナデ ケズリ	体外:煤	H18
	49	Ⅱ層	須・小瓶	J12	(5.4)		(1.0)	黒 灰	ナデ	ナデ	内外:自然釉	PS19
	50	Ⅱ層	須・壺	I12			(5.9)	褐灰 にぶい黄橙	ナデ	ナデ		PS41
	51	Ⅱ層	須・横瓶	J9	(16.4)		(4.9)	灰	ナデ 当て具痕	ナデ タタキ	口:自然釉	PS24
	52	Ⅱ層	須・甕	K12	(23.6)		(3.7)	灰	ナデ 当て具痕	ナデ タタキ		PS17
32	55	4号溝	土・甕	H10	(32.0)		(5.2)	橙	ナデ ケズリ	ナデ ケズリ		H 7
34	56	カクラン	土・高杯	J12	4.4		(3.5)	橙 黄灰	ナデ	ナデ	台内:煤	E 5
	57	カクラン	須・杯蓋	F12	(13.6)		(2.2)	オリーブ灰 灰～黒	ナデ	ナデ	口:自然釉	PS14
	58	耕土	須・杯蓋	I10	(16.0)		(1.8)	灰	ナデ	ナデ		PS38
	59	表土	須・杯	K13		(8.7)	(1.7)	灰 オリーブ灰～ 暗緑灰	ナデ	ナデ	底内:自然釉 口:打ち欠き 底外:工具痕 回転糸切り	PS36
	60	耕土	須・有台盤	K10			(3.2)	灰	ナデ	ケズリ ナデ	回転糸切り	PS35
	61	カクラン	須・有台杯	G 8	(13.6)	(10.0)	4.2	灰	ナデ	ナデ		PS29
	62	カクラン	須・有台杯	I10			(1.5)	灰白	ナデ	ナデ	底内:摩・ヘラ記号 「×」 回転糸切り	PS31
	63	カクラン	須・有台皿	F7		(16.2)	(1.6)	灰	ナデ	ナデ	底内:摩 回転糸切り	PS27

第20表　名和衣装谷遺跡出土土器観察表（3）

図	No.	遺構・層位	器種	地区	法量(cm) 口径	底径	器高	色調 外 内	調整 内	外	備考	実測No.
34	64	耕土	須・有台椀	G10	(17.0)		(5.9)	灰 灰白	ナデ	ナデ	口:自然釉	PS28
	65	カクラン	須・転用硯	I10	(14.1)	(9.0)	1.3	オリーブ灰	ナデ	ナデ	底内:摩 皿転用 回転糸切り	PS26
	66	耕土	須・皿	I11	(16.0)	(8.8)	2.4	灰白	ナデ	ナデ	底外:板痕 回転糸切り	PS37
	67	耕土	須・有台皿	G 6	(13.4)	(9.6)	1.9	灰～緑黒	ナデ	ナデ	内外底:摩	PS 3
	68	表採	土・甕		(27.8)		(5.0)	にぶい黄橙	ナデ ケズリ	ナデ ケズリ		H28
	69	耕土	須・甕	H10	(43.2)		(6.2)	黄灰 にぶい黄	ナデ 指頭圧痕	ナデ	口:波状文	PS32
	70	カクラン	須・甕	K11	(23.4)		(11.2)	明黄褐～黄灰	ナデ 当て具痕	ナデ	口外:沈線	PS40
	71	耕土	須・甕	H 9			(4.5)	灰	当て具痕 タタキ	ナデ タタキ		PS33
	72	カクラン	土器・焙烙	G12	(32.0)	(28.8)	3.8	にぶい橙	ナデ	ケズリ 指頭圧痕	体:煤 底外:剥離材付着	E 2
	73	耕土	陶・有台鉢	E13		(14.3)	(5.7)	灰オリーブ	ナデ 施釉	ナデ ケズリ 施釉	肥前系陶器 底断面:煤 底:釉拭取り	E 8

第21表　名和衣装谷遺跡出土土製品観察表

図	No.	遺構・層位	種別	地区	法量(cm) 最大径	孔径	最大高 最大長	色調 外 内	調整 内	外	備考	実測No.
29	53	Ⅱ層	土錘	I8	2.0	0.5	3.3	にぶい黄橙～ にぶい赤橙	ナデ	ナデ	孔内:棒による 擦痕	H25
	54	Ⅱ層	鞴	I9	(55.0)	(13.0)	(46.1)	にぶい橙 にぶい褐色	ケズリ ナデ	ケズリ ナデ		H29

第22表　名和衣装谷遺跡出土石製品観察表

図	No.	遺構・層位	種別	地区	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重さ(g)	材質	備考	実測No.
16	S 1	Ⅳ層	石錘	L10	6.6	5.5	2.1	100.0	角閃石安山岩		S 8
	S 2	Ⅳ層	石錘	L10	7.1	7.1	1.9	125.0	角閃石安山岩		S 4
	S 3	Ⅲ層	石錘	K11	2.2	1.4	3.5	0.6	黒曜石		S10
24	S 4	1号溝	石錘	L11	6.8	5.4	2.9	120.0	角閃石安山岩	縄ずれ？	S 1
30	S 5	Ⅱ層	凹石	J10	11.0	8.2	5.8	750.0	角閃石安山岩	敲打痕 磨石転用	S 7
	S 6	Ⅱ層	凹石	K 9	10.9	9.4	5.7	718.0	角閃石安山岩	敲打痕　擦痕 磨石転用	S13
	S 7	Ⅱ層	磨石	J10	9.1	10.7	6.6	825.0	角閃石安山岩	擦痕	S15
	S 8	Ⅱ層	磨石	J11	11.1	10.0	5.2	785.0	角閃石安山岩	擦痕	S 3
	S 9	Ⅱ層	磨石	K10	9.3	8.6	4.2	475.0	角閃石安山岩	擦痕 敲石に転用か	S16
	S10	Ⅱ層	石錘	J 9	7.1	5.5	2.6	145.0	角閃石安山岩		S12
	S11	Ⅱ層	石錘	L10	6.5	5.7	1.8	100.0	角閃石安山岩		S 6
	S12	Ⅱ層	砥石	J12	12.2	7.5	3.9	520.0	角閃石安山岩		S 9
35	S13	耕土	磨石	K12	7.5	9.4	4.5	420.0	角閃石安山岩	敲打痕・擦痕 敲石に転用か	S18
	S14	耕土	石錘		6.8	5.6	1.8	90.0	角閃石安山岩		S 5
	S15	耕土	石鏃	K 9	1.8	1.6	0.5	1.0	黒曜石		S14
	S16	耕土	石鏃		1.7	1.3	3.5	0.5	サヌカイト		S11

第23表　古御堂金蔵ヶ平遺跡出土土器観察表

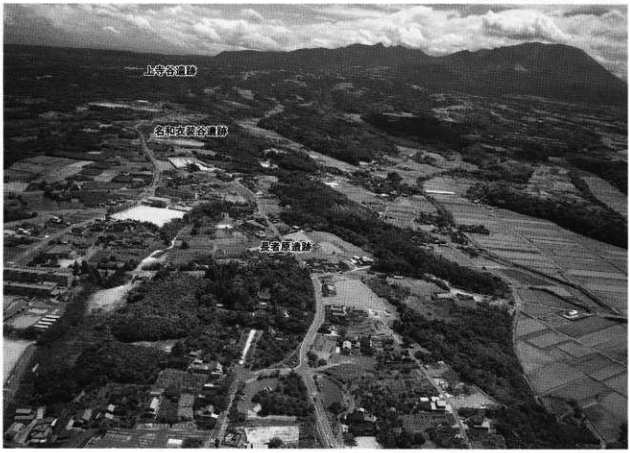
図版番号	No.	地区	種別・器種	法量 口径(cm)	法量 縦位(cm)	法量 横位(cm)	色調 外	色調 内	調整 内	調整 外	胎土	備考
21-2	1	2号小穴	押　深鉢	—	4.5	4.5	明黄褐色		粗いナデ	山形文	1㎜以下の砂粒含	貫鳥式
21-2	2	第2遺構検出面上—C 5	押　深鉢	—	5.0	4.7	にぶい黄橙色		粗いナデ	梅円文	2㎜以下の砂粒含 繊維の脱痕	貫鳥式
21-2	3	Ⅱ層—C 5	押　深鉢	—	6.7	5.5	明黄褐色		粗いナデ	梅円文	2㎜以下の砂粒含	貫鳥式 2点が接合
21-2	4	Ⅱ層—C 5	押　深鉢	—	5.3	3.5	明黄褐色		粗いナデ	梅円文	2㎜以下の砂粒含	貫鳥式
21-2	5	Ⅱ層—C 5	押　深鉢	—	9.2	7.4	明黄褐色 明黄橙～褐色		粗いナデ	梅円文	3㎜程度の砂粒含 繊維の脱痕	貫鳥式 3点が接合
21-2	6	Ⅱ層—C 5	押　深鉢	—	3.2	2.9	明黄褐色		粗いナデ	梅円文	2㎜以下の砂粒含 繊維の脱痕	貫鳥式
21-2	7	Ⅱ層—C 5	押　深鉢	—	3.8	3.9	明黄褐色 暗灰黄色		粗いナデ	梅円文	2㎜大の砂粒を多く含む	貫鳥式
21-2	8	Ⅱ層—C 5	押　深鉢	—	3.5	2.5	明黄褐色 暗灰黄色		粗いナデ	梅円文	1㎜程度の砂粒含	貫鳥式
21-2	9	Ⅱ層—C 5	押　深鉢	—	3.5	2.2	明黄褐色 暗灰黄色		粗いナデ	梅円文	1㎜程度の砂粒含	貫鳥式
21-2	10	Ⅱ層—B 4	押　深鉢	—	4.8	2.5	褐色		粗いナデ	梅円文	3㎜程度の砂粒含 繊維の脱痕	高山寺式
21-2	11	Ⅱ層—B 5・C 5	押　深鉢	—	3.2	4.7	赤褐色		粗いナデ	不明	1㎜程度の砂粒含 繊維の脱痕	早期 2点が接合
21-2	12	Ⅱ層—C 5	粗　深鉢	—	4.2	5.5	褐色		条痕	条痕	1㎜以下の砂粒含	不明
21-2	13	Ⅱ層—C 5	粗　深鉢	—	3.5	6.1	赤褐色		条痕	条痕	2㎜以下の砂粒含	不明
21-2	14	Ⅱ層—C 5	粗　深鉢	—	—	—	明黄褐色		条痕	条痕	2㎜程度の砂粒含	不明
21-2	15	Ⅱ層—C 4	弥　壺	(14.6)	—	—	明黄橙色		横方向のナデ	横方向のナデ	2㎜程度の砂粒含	弥生後期
21-2	16	Ⅰ層—C 4	弥　壺	(17.6)	—	—	にぶい黄橙色		横方向のナデ	横方向のナデ	3㎜程度の砂粒含	弥生後期
21-2	17	Ⅰ層—B 3	土　壺	(22.2)	—	—	明黄橙色 にぶい黄橙色		ヨコナデ	ヨコナデ	2㎜以下の砂粒含	古墳中期
21-2	18	Ⅰ層—B 2	土　壺	—	—	—	明黄橙色		ヨコナデ	ヨコナデ ミガキ	3㎜程度の砂粒を多く含む	体部外面に黒斑
21-2	19	Ⅰ層—B 5	須　鉢	—	—	—	暗灰色 灰色		回転ナデ	回転ナデ	1㎜程度の砂粒含	古墳中期
21-2	20	Ⅰ層—B 4	押　深鉢	—	6.0	7.6	明黄褐色		粗いナデ	粗いナデ	1㎜以下の砂粒含	貫鳥式
21-2	21	調査区内—C 5	粗　深鉢	—	3.0	4.1	褐色		粗いナデ	粗いナデ	2㎜以下の白色砂粒を多く含む	不明
21-2	22	調査区内—B 5	土　低脚杯	—	—	—	橙色		ヨコナデ	ヨコナデ	1㎜以下の砂粒含	古墳中期

第24表　古御堂金蔵ヶ平遺跡出土石器観察表

図版番号	番号	地区	種別	長軸(cm)	厚さ(cm)	短軸(cm)	特徴	石材・重量(g)
22-2	S 1	第2遺構検出面上—C 5	石鏃	2.3	3.5	1.5	抉り長は5㎜。断面はレンズ状で、先端部から基部、あるいは基部から先端部に向かい細部調整を施す。	無底品安山岩 0.7
—	S 2	Ⅱ層—C 5	石鏃か	1.9	0.5	1.5	抉り長は1㎜。断面はレンズ状で、連続する剥部調整を施す。あるいは未製品か。	黒曜石 0.9
22-2	S 3	Ⅱ層—C 5	石鏃	2.6	5.0	2.2	抉り長は6㎜。断面はレンズ状で、先端部から基部に向かい細部調整を施す。	黒曜石 1.6
22-2	S 4	Ⅱ層—B 5	凹石	9.0	7.9	3.4	両面とも打ち欠きの痕跡をもつ。断面は台形で、平面形は不整な平行四辺形。	黒曜石 265
22-3	S 5	Ⅱ層—B 4	石斧	8.8	2.5	5.4	擦製石斧。刃部を両面から研ぎ出す。刃部に3箇所の欠損あり。使用痕跡か。	緑色片岩 160
22-3	S 6	Ⅱ層—C 5	磨石	10.5	8.7	6.8	全面不明個々ながら磨痕あり。断面やや梅円形状。	安山岩 845
22-3	S 7	Ⅱ層—C 5	磨石	11.3	9.5	5.8	全面不明個々ながら磨痕あり。断面は扁平。一部敲打痕跡かも。	安山岩 870
22-3	S 8	Ⅱ層—C 5	敲石	8.7	7.7	5.7	全面不明個々ながら磨痕あり。断面はやや扁平。	安山岩 550
22-3	S 9	Ⅱ層—C 5	磨石	7.4	5.7	2.1	一部欠損。あるいは敲打痕か。	安山岩 110
22-3	S10	Ⅱ層—C 5	磨石	9.9	9.3	5.1	全面不明個々ながら磨痕あり。断面は扁平。一部敲打痕跡か。	安山岩 665
22-3	S11	Ⅱ層—C 5	敲石	10.0	8.8	4.6	全面不明個々ながら磨痕あり。断面は扁平。一部敲打痕跡か。	安山岩 520
22-3	S12	Ⅱ層—B 4	敲石	10.1	8.9	3.2	全面不明個々ながら磨痕あり。断面は扁平。一部敲打痕跡か。	安山岩 500
22-3	S13	Ⅱ層—B 4	磨石	9.1	8.1	4.1	全面不明個々ながら磨痕あり。断面は扁平。	安山岩 410
22-3	S14	Ⅱ層—C 5	磨石	8.2	4.8	2.6	全面不明個々ながら磨痕あり。格円形で、断面は扁平。	安山岩 140
22-3	S15	Ⅱ層—B 5	剥石	13.7	4.1	8.6	一部欠損。断面は緩い三角形状で、一つの隅面に磨痕あり。	安山岩 745
22-3	S16	Ⅱ層—C 5	磨石	6.7	3.0	5.0	一部欠損。不明瞭ながら磨痕あり。	安山岩 100
22-3	S17	Ⅰ層—B 3	掻器	7.4	5.2	1.0	断面は浅い台形状。両側ともに中央から端部に向かい連続する調整により刃部を作り出す。欠損後にも使用痕跡あり。	無底品安山岩 44.2

第25表　古御堂金蔵ヶ平遺跡出土鉄器観察表

図版番号	番号	地区	器種	長軸(cm)	厚さ(mm)	短軸(cm)	特徴	備考
21-2 22-1	F 1	2号小穴	鉄鏃か	4.5	5	3.3	二等辺三角形状で、先端部の尖る鉄製品。やや湾曲する。錆進品の可能性あり。全面被由。	



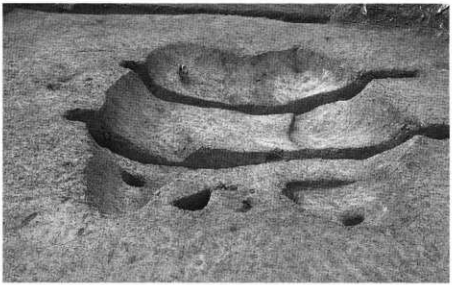
1．調査地の周辺（北西から）

2．調査区遠景（北西から）

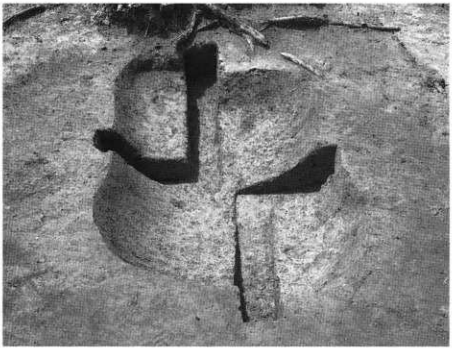
図版2　名和衣装谷遺跡

1．調査区近景（北西から）

2．最終遺構確認面完掘状況（北西から）



1．1号土坑完掘状況
（北東から）

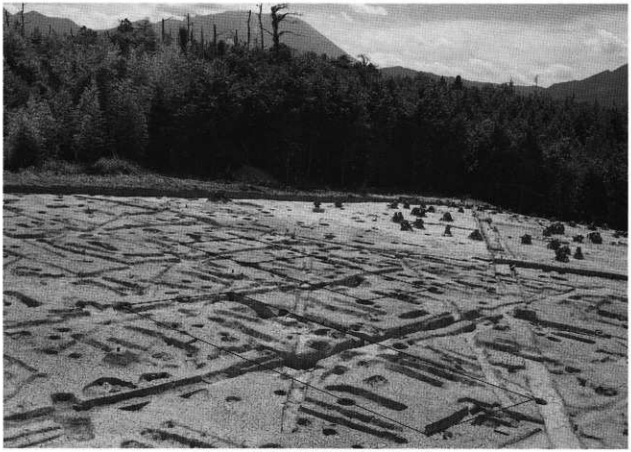


2．2号土坑完掘状況
（北西から）

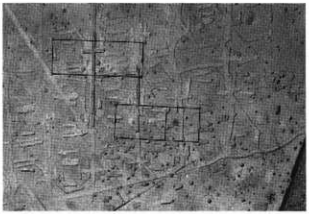
3．4号土坑完掘状況
（西から）

図版4　名和衣装谷遺跡

1．第2遺構面完掘状況（南から）

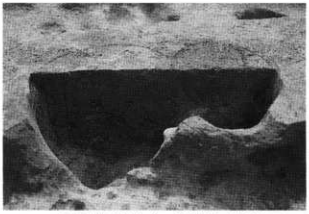


2．1・2号掘立柱建物完掘状況（北から）



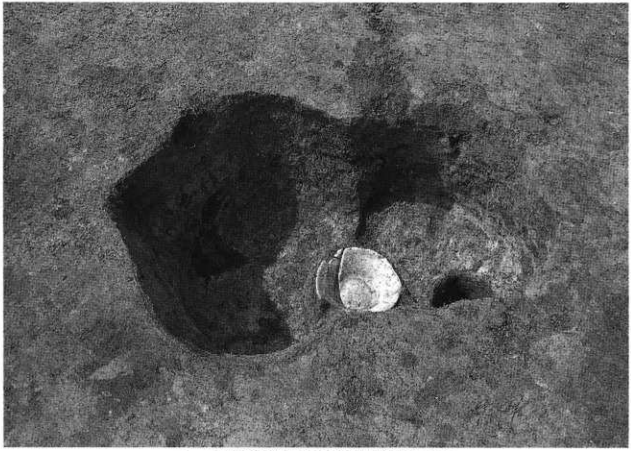
1．1・2号掘立柱建物完掘状況（垂直）

2．1号掘立柱建物柱穴2土層断面（南から）



3．2号掘立柱建物柱穴1土層断面（北東から）

4．2号掘立柱建物柱穴8遺物出土状況（南東から）

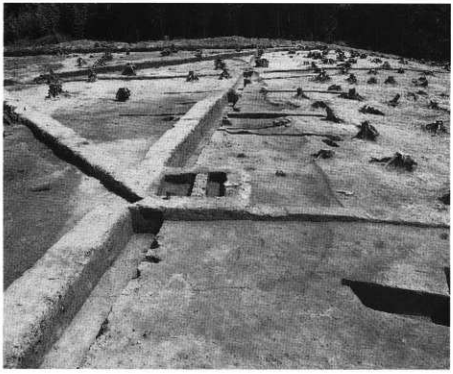


5．2号掘立柱建物柱穴15遺物出土状況（北から）

図版6　名和衣装谷遺跡

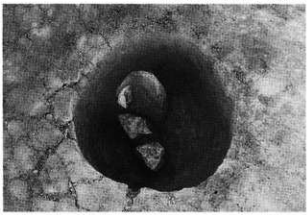
1．19号土坑遺物出土状況
（北から）

2．1・2号溝、23号土坑
完掘状況（南東から）



3．3号溝完掘状況
（北西から）

1．4号小穴遺物出土状況（南東から）



2．6号小穴遺物出土状況（北から）

3．7号小穴遺物出土状況（南東から）

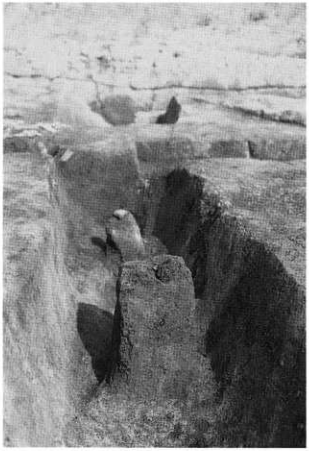
4．8号小穴土層断面（西から）

5．硬化面検出状況（北東から）

図版8　名和衣装谷遺跡

1．第1遺構面完掘状況（北東から）

2．4号溝完掘状況（北西から）



3．4号溝遺物出土状況（北西から）

1．1・2号棚列完掘状況（北東から）

2．28号土坑遺物出土状況（南から）

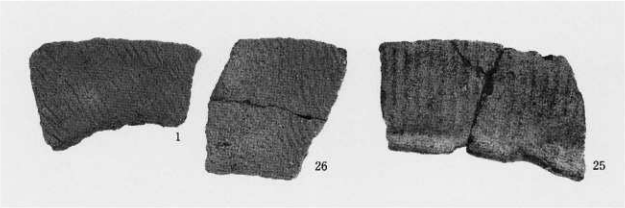
3．29号土坑遺物出土状況（南東から）

4．30号土坑土層断面（北東から）

5．31号土坑完掘状況（南西から）

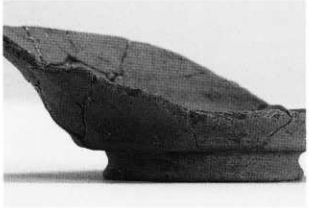
6．道路状遺構検出状況（南東から）

図版10　名和衣装谷遺跡

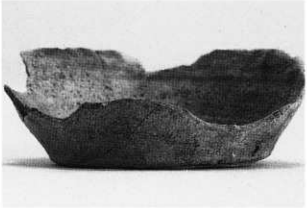


1．Ⅱ・Ⅲ層出土縄文土器

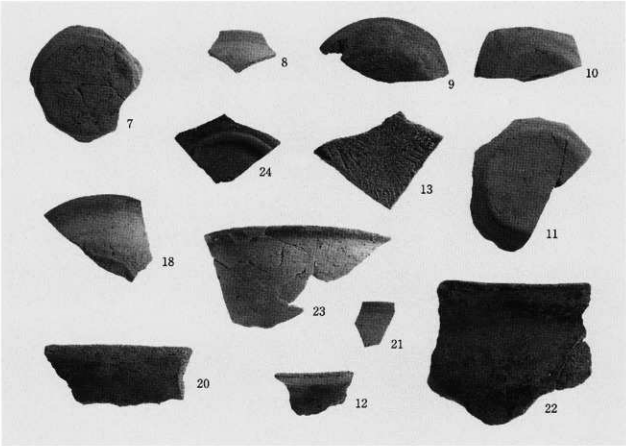
2．2号掘立柱建物出土土器



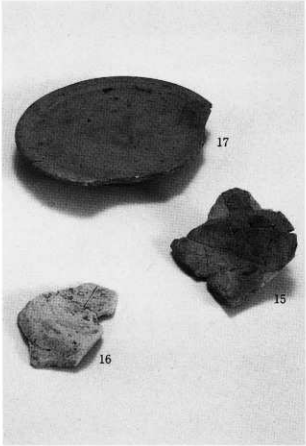
3．5拡大写真



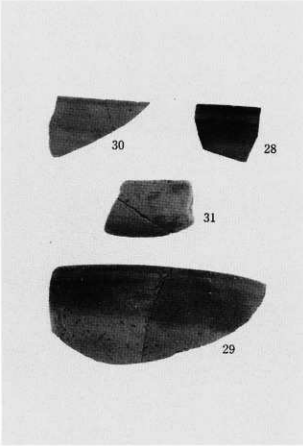
4．4拡大写真



1．平安時代遺構出土土器

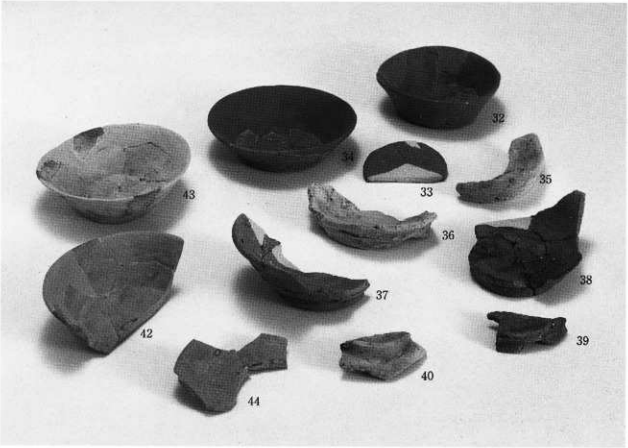


2．3号小穴出土土器

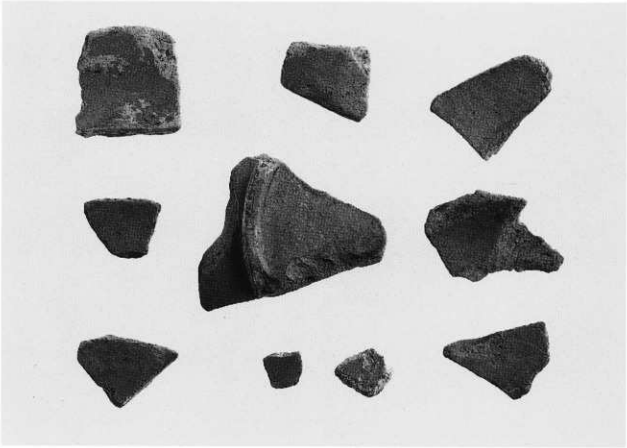


3．Ⅱ層出土供膳具（8世紀～9世紀前半）

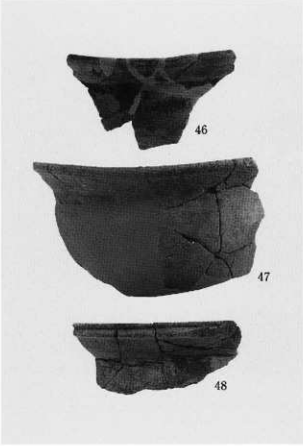
図版12　名和衣装谷遺跡



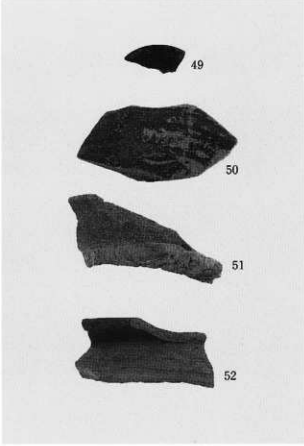
1．Ⅱ層出土供膳具（9世紀前半）



2．Ⅱ層出土緑釉陶器皿



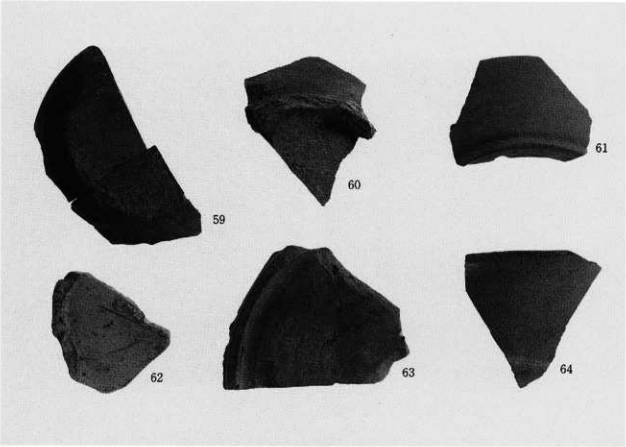
1．Ⅱ層出土土師器貯蔵具



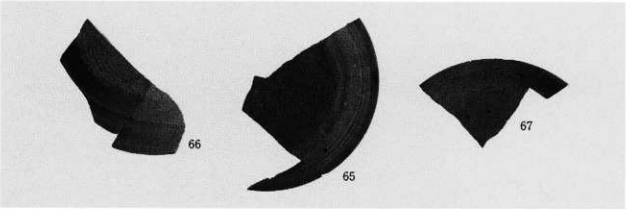
2．Ⅱ層出土須恵器貯蔵具

3．Ⅱ層出土土製品

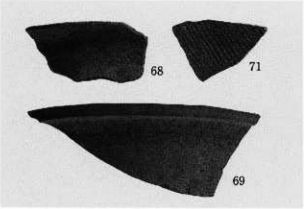
図版14　名和衣装谷遺跡



1．遺構・包含層外出土供膳具（8世紀～9世紀前半）

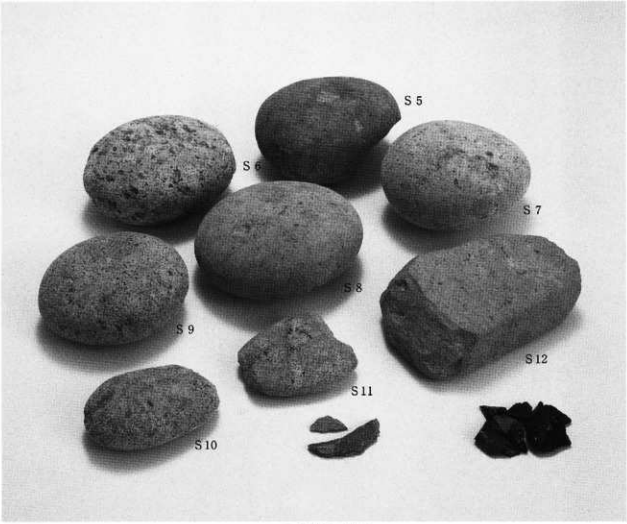


2．遺構・包含層外出土供膳具（9世紀後半）

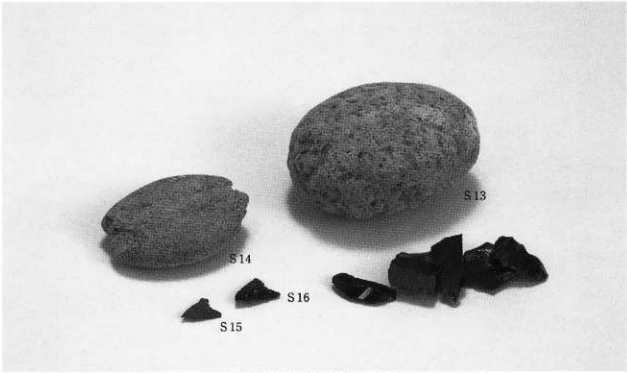


3．遺構・包含層外出土貯蔵具1

4．遺構・包含層外出土貯蔵具2



1．Ⅱ層出土石製品



2．遺構・包含層外出土石製品

図版16　名和衣装谷遺跡

鉄滓・鉄製品

1．調査区遠景（西から）

2．調査区遠景（北から）

図版18　古御堂金蔵ヶ平遺跡

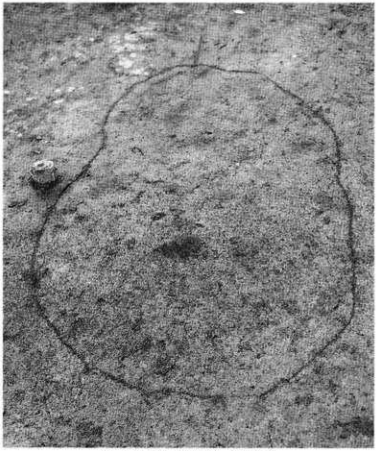
1．第2遺構検出面完掘状況（北から）

2．遺物（17ほか）出土状況（南東から）

3．遺物（4～9・11,S10・14）出土状況（南東から）

1．土坑・小穴完掘状況（南東から）

2．遺物（S４）出土状況（東から）



3．２号土坑検出状況（西から）

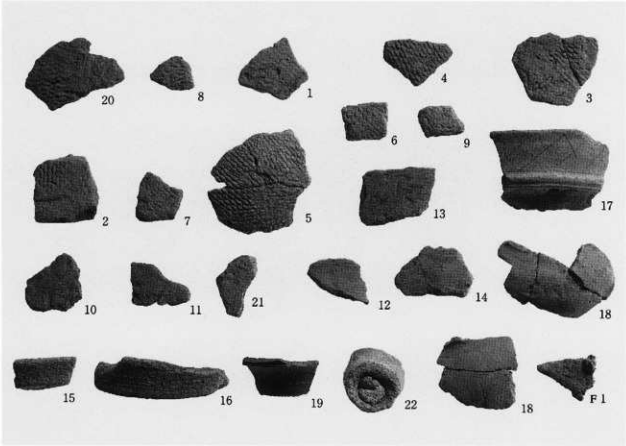
図版20　古御堂金蔵ヶ平遺跡

1．1号土坑、小穴完掘状況（南東から）

2．2号小穴遺物出土状況（北から）

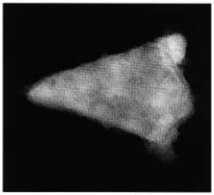
3．1号溝完掘状況（北西から）

1．1号土坑、小穴検出状況（南東から）

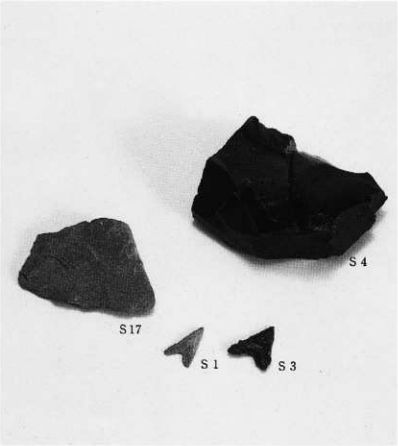


2．出土遺物（1～22,F1）

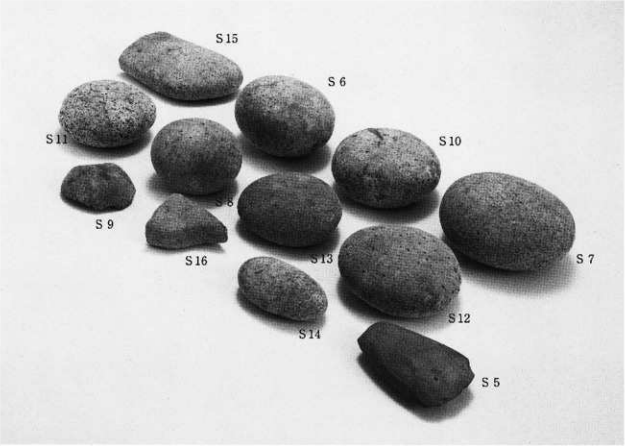
図版22　古御堂金蔵ヶ平遺跡



1．F1のX線写真



2．出土遺物（S1・S3・S17）



3．出土遺物（S5～16）

報告書抄録

ふりがな	なわいしょうたにいせき　こみどうかなくらがなるいせき
書名	名和衣装谷遺跡　古御堂金蔵ヶ平遺跡
副書名	一般国道9号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅳ
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書
シリーズ番号	82
編著者名	八峠　興　　湯川善一
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団　鳥取県埋蔵文化財センター
所在地	〒680−0151 鳥取県岩美郡国府町宮下1260
発行年月日	西暦2003（平成15）年3月28日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
名和衣装谷遺跡（なわいしょうたにいせき）	鳥取県西伯郡名和町（とっとりけんさいはくぐんなかちょう）大字名和字衣装谷（おおあざなわかみしょうたに）1165−1ほか 字小三林（あざこさんばやし）1131−2ほか	31378	307	35度29分48秒	133度30分28秒	20020422～20021024	7,789㎡	一般国道9号（名和淀江道路）の改築
古御堂金蔵ヶ平遺跡（こみどうかなくらがなるいせき）	鳥取県西伯郡名和町（とっとりけんさいはくぐんなかちょう）古御堂金蔵ヶ平（こみどうきんぞうがなる）588ほか	31378	305	35度29分05秒	133度29分38秒	20020911～20021111	1,032㎡	一般国道9号（名和淀江道路）の改築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
名和衣装谷遺跡	集落	縄文時代中期	土坑、小穴、包含層	縄文土器（中期）、黒曜石石鏃・剥片、石錘、敲石、凹石、磨石	
	官衙？	奈良・平安時代	掘立柱建物、溝、土坑、小穴、硬化面、包含層	緑釉陶器、転用硯、須恵器、土師器、砥石、鉄釘	官衙または居宅か
		近世	柵列、小穴 道路状遺構		
古御堂金蔵ヶ平遺跡	集落	中世以前	土坑、小穴、包含層	押型文土器、弥生土器、土師器、須恵器、黒曜石石鏃・剥片、安山岩石鏃、石斧、鉄鎌か	
		中世以降	溝		

鳥取県教育文化財団調査報告書 82

一般国道９号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

鳥取県西伯郡名和町

名和衣装谷遺跡（なわいしょうたにいせき）

古御堂金蔵ヶ平遺跡（こみどうかなくらがなるいせき）

発　行　2003年３月28日

編　集　財団法人　鳥取県教育文化財団

鳥取県埋蔵文化財センター

〒680－0151　鳥取県岩美郡国府町宮下1260

電話（0857）27－6711

発行者　財団法人　鳥取県教育文化財団

印　刷　株式会社　鳥取平版社